

'79

シナリオ作家協会編

年鑑代表シナリオ集

女の髪の毛

復讐するは我にあり

もっとなやかに
もったたたかに

絞殺

あゝ野麦峠

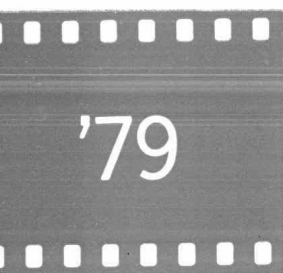
太陽を盗んだ男

月山

処刑遊戯

Keiko

十九歳の地図



年鑑代表シナリオ集

シナリオ作家協会編　ダヴィッド社刊

一九八〇年五月一五月初版発行

年鑑代表シナリオ集

一九七九年版

検印廃止

定価 2,500円

◎

編者	シナリオ作家協会
発行者	越後谷勇治郎
印刷	東銀座印刷出版株式会社
製本	松本精喜堂
徳住製本所	
発行所	株式会社ダヴィッド社

株式会社
東京都新宿区簗笥町三九
振替 東京三六三一四四

Printed in Japan

赫い髪の女

荒井晴彦・・・・・・・・・・・・・三

復讐するは我にあり

馬場 当・・・・・・・・・・・・・九

もつとしなやかに

小林竜雄・・・・・・・・・・・・・五

もつとしたたかに

絞殺

新藤兼人・・・・・・・・・・・・・六

あゝ野麦峠

服部 佳・・・・・・・・・・・・・二六

太陽を盗んだ男

レナード・シュレイダー／長谷川和彦・・・・・四七

月山

高山由紀子・・・・・・・・・・・・・一六

処刑遊戯

丸山昇一・・・・・・・・・・・・・二五

Keiko

クロード・ガニオン・・・・・・・・・・・・・二九

十九歳の地図

柳町光男・・・・・・・・・・・・・二六

作品解説へ鬼頭麟兵

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二六

一九七九年シナリオ作家作品一覧

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二六

一九七九年シナリオ関係受賞一覧

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二六

一九七九年雑誌掲載シナリオ一覧

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二六

一九七九年映画関係出版書籍一覧

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二六

シナリオ作家協会会員住所録

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二六

に っ か つ 作 品

赫い髪の女

荒井晴彦

スタッフ
プロデューサー
企画 山田 耕朗
原作 中上 健次
監督 神代 辰巳
撮影 前田 米造
キャスト
赫い髪の女
和子 宮下 順子
光造 石橋 蓮司

三浦 耕朗
山田 健次
中上 辰巳
神代 米造
前田 順子
宮下 蓮司
石橋 蓮司

孝男
アル中の男
春子の姉
光造の姉
その男
シャブ中の女
その亭主
社長の
人夫 A

阿藤 昇海
三谷 美也子
山口 萌子
絵沢 初男
山谷 洋子
石堂 三郎
庄司 明
高橋 了
佐藤 一

1 海は日を撥ねている

光造、残土を載せたダンプを駆っている。

海沿いの道だ。

ひたむきに歩いている女。

擦れ違うダンプに煽られ、女の赤い髪が舞う。

2 工事現場

ショベル・カーに掘り起された土、ダンプの荷台を満たしてゆく。

光造、人夫たちに混じり、基礎を打つ準備をしている。

若い人夫「(ショベルカーを見やり) 雨降らんでも土方死によるで、ほんま」

光造「免許取ったらええんじゃ」

若い人夫「……………」

「そんなん甲斐性あったら、土方しとらんで、なア」

いつの間に現われたのか、少女(和子)立っている。

光造「(驚き) なんじゃ、何しにきたんじや」

和子「ずいぶんと挨拶やな。来たらいいけんの」

光造「……(若い人夫に) 来いや」

光造、ショベル・カーに向う。

運転台の孝男、エンジン切り、

孝男「あいつ、何しにきたんじや」



光造「阿呆。誰の儲けじゃ」
孝男「……ま、社長やろな」
和子、笑う。

孝男「何がおかしいんじや」
和子「二人とも、かしこいな思て……」

孝男「(若い人夫に) おい、乗れや」
宙に止っていたバケツ動き出す。
和子、しゃがみ込み、眺めている。

ダンブに戻る光造を追って、慌てたように降りてくる孝男。

孝男「メシ食いに行くんやろ。乗っけてつてくれや」

チラッと和子気にしながら、ダンブにシート掛け始める。

和子、やってきて孝男に可愛らしい模様の包み差し出す。

孝男「……………」
和子「弁当や」

孝男「……ひとつ、きりか」
和子「うち、仕出し屋違う」

和子、踵を返す。

光造「おまえに弁当届けにきたんか」
孝男「(首傾け) どないなつとんのやろ」
光造「(にやつき) おまえに惚れたんじや」

孝男「(満更でもなく) そやろか……」
去ってゆく和子を見遣る。

と、
すーっと廻ってきたバケツ、二人の真

上で止り、パラパラッと土降らす。
孝男「わ。てんごうすんなッ」
二人、慌てて避ける。

3 朽ちかけた舟着き場に朽ちかけた舟が紡
つてある(回想)

光造と和子、歩いてくる。

和子「話で、なに？」
光造「マワしたろ思とる」

孝男、番屋の中から出てくる。
和子「(後退り) だましたんやな。うち、帰るわ」

光造、立ち塞る。

光造「かまんやないか」
和子「……あんだだけやったらかまんよ。けど、マワシは嫌や」

光造「奴が惚れとんじや」
和子、身を翻す。

孝男、飛びつき、押し倒す。

和子「痛ッ。いや、いやッ」
孝男「好きなんや。やりたいんじや」

孝男、打たれながら、和子の裾を割る。
和子「すけべ。父さんに言うよ」
孝男、怯む。

光造「かまん。いてまえ」
和子、両手を抑える光造の腕に噛みつく。

光造「痛ッ。こん箱入り娘、めちゃくちや噛みよる」

光造、血の滲んだ腕を見、和子の煩張

る。

和子「(観念)……こんなところでいや」

光造「こんなところもどんなところもあるか」

孝男「(パンティ剥ぎ)や、やるで」

ズボン下げ、太腿割り裂く。

和子「乱暴は嫌や……」

途端、顔歪め、大きくのけぞる。

孝男、性急に尻突き動かし、果てる。

孝男「(ズボンずり上げ、息を呑む)初めてやったんか……」

孝男、首に巻いていたタオルで、和子の股間拭ってやる。

孝男「痛かったやろな」

と光造見上げる。

光造「かまんで。わしにさせとないやろ」

足開いたままの和子、空を見ている。

孝男「……決めた通りの順番や」

光造、背き、ズボン降ろす。

和子「……こんなん、人に言うたら嫌や」

光造、被ってゆく。

4 ダンプの運転台

フロントグラスにボツリと雨滴。

孝男「三月も前やで。どっちにしたらるか悩ん

どったんかな。小さい胸痛めて」

光造「阿呆か。調子乗って、深入りせんほう

がええで」

孝男「面白いんやろ、弁当貰えんで」

光造「どないな人間の娘か、忘れたんか」

孝男「(急に不安)共犯やないか」

光造「先をやった方が罪重いんじゃ」

孝男「かまん。バレたら海や。鮪船に乗った

る」

ワイパー越しに、道端のコイン・レスト

ラン、人影が見える。

ライトに赤い髪が光る。

孝男「女や。ひとりでうどん食つとるで……

光やん、いけるんと違うか」

光造、ブレーキ踏む。

孝男「嫌じゃ嫌じゃもいいのうち」

光造「えらい自信持ちよったな。(ニヤッと

笑い)二人して鮪船か」

ダンプをバックさせてゆく。

女、ダンプ気にもせず、カップうどんす

すっている。

孝男、助手席の窓から身乗り出し、

孝男「乗っていかへんか」

女、振り向く。

孝男「風邪ひいてまうで」

女、背き、ズブッと汗すすり込む。

孝男、ドア開け、手を差し伸べる。

女、運転台見廻し、

女「えらいキレイにしとるんね」

孝男「どこまで行くんや」

女「分らへん」

孝男「分らんで……」

女「どこでもええんや」

光造、女を値踏みするように一瞥。

光造「かまんのか。どこでも」

女「かまんよ」

孝男「(勢いづく)よっしゃ」

光造、アクセル踏み込む。

しぶきを上げて疾走するダンプ。

ワイパーの音、急くように軋んでいる。

女、微かに声にならない叫び。

女「ちよっと、停めて」

はやくも腰浮かす。

女「うち、降りるわ」

狼狽する孝男と光造。

孝男「こんなところ、何もなくて。乗ったた

らええやないか」

女「降りる」

女、ドア開ける。

光造、慌ててブレーキ踏む。

光造「阿呆っ。危ないやないか」

女、降りる。

孝男と光造、目配せして背き合う。

女、雨の中に立ち、途方に暮れたよう。

孝男「濡れるで。小便やったら、はよ、しい

な」

孝男、降りかける。

女、首振りながら、後退り。

光造「わしらが悪いんか」

女「……車、汚したらあかんし……」

孝男「洩らしよったんか」

シート撫で、臭い嗅いでみる。

女「(笑う)アレ、始つてもうたんよ」

光造「アレ……?」

女、対向車のライトに浮び上る。

× × × × ×

街の灯りが近づいてくる。

孝男「わし、うちとこで降りるわ」

光造「……………(苦笑)」

孝男「血イは苦手じや。ついとらんの」

光造「えらい拾い物じや」

孝男「駅ではかしたらええ」

光造「ああ……」

眠り込んでいる女の髪から雫が垂れる。

光造「……………こん雨じや、明日は休みやな……」

5 部屋

汚れた下着や古週刊誌散乱している。

光造、万年床の下半分に置かれた炬燵に

足突つ込み、茶碗酒呷っている。

トイレの戸開き、女、出てくる。

女「ビニールの袋かなんかあらへん」

女、汚れたパンティ後手に摘み、探す。

女「あ、これでええわ。けど、洒落れたも

んあるなア」

女、サララップでパンティくるみ、台

所の隅に置き、

女「薬屋開いとして助かったなア」

女、炬燵に足入れる。

光造「蒲団、これつきりやで」

女「かまん。炬燵もあるし、二人で寝るの

やつたら、寒いことない」

女、上眼使うと、

女「触つたらいけんよ。手、汚れるし」

光造、茶碗押しやる。

女、軽く口つけ。

女「おいし……」

笑うと、あおむいて、一息に飲む。

女の小さな喉仏が動いている。

× × × × ×

光造に身をすり寄せるようにして寝息た

てている女。

光造、女の額にかかる赤い髪をかきあ

げ、手に巻きつけている。

長く尾を引いた叫び声、夜を裂く。

ビクッと眼を開け、半身起こす女。

光造「下や」

再び、金切り声。

光造「シャブ中の夫婦がおるんじや」

女、背き、笑み作ると、

女「ずつと起きてたん」

光造「寝ろいう方が無理じや」

女、シュミーズからはみ出た胸乳、そつ

と押し込み、

女「……………あかんねやもん」

光造「触つてみい。パンツ破れそうや」

女、布団剥ぎ、

女「ようイキッとするねえ」

光造の下腹部に顔伏せてゆき、額に被さ

る髪払いながら、頭を上下させる。

光造、耐らず、じれたように女の顔突き

放し、女を組み敷く。

女「いけんよ。ふさがつとるんよ」

女、股間両手で抑える。

光造「ちよつとだけじや。かまんやないか」

女「いやあ。あかん、あかん……お腹ん中

に入ってしまった……あ……」

叫び声、長く尾を引く。

6 雨樋、トクトクと音を立てている

アパートの前の空地に停っているダン

プ、濡れそぼっている。

7 部屋

女、赤い髪をふり立てるようにゆっくり

と口を動かして飯を食べている。

シュミーズに透けた黒い乳首、生き物の

ように場所を変える。

光造の視線に、女、飯呑み込み、

女「なにい?」

光造「……乳首」

女「黒いやろ……子供、二人おったんよ」

光造、シュミーズの上から乳首つまむ。

女「上が四歳、下が三歳、二人とも男……」

女、茶碗と箸を持って立ち上り、音させ

て置くと、蛇口ひねる。

女「ちよつと、うちも入れて」

女、光造の脇にもぐり込み、

女 「なんや知らん寒い」

光造の裸の胸を抱き、足絡ませる。

光造、指を尻から滑り込ませ、ヒモを弄ぶ。

光造 「ヒモ、なくならんかったな」

女 「うちがずっと獨んどったさか……初めてや、あんなに入れたままする男」

光造、照れたように笑い、

光造 「チンポの先、痛うなったわ」

女 「……そうやろな。……ごめん。あ、引つ張つたらアカンで」

光造 「しもないヒモじゃ」

女 「シャブてやってみたことある？」

光造 「ない」

女 「そのあたりに打つたら効くて」

光造 「ここにシャブをか？」

女、クスツと笑う。

光造 「打つたことあるんかい？」

女 「友だちがおつたんよ。その子、若い男と仲良うなつて、シャブも中毒になつて、海に入つて死んでしもうたんよ。体中、針の痕やつた。塩水呑んで苦しかったんか、シャブでええ氣持の真最中やつたんか、死体の足の指、全部反りかえつた……こんなにしてな」

女、手の指反らせてみせる。

8 光造、岸壁にうちあげられた水死体を思

反りかえつた足の指から水が滴っている。

その苦痛とも歓喜ともつかない死顔、赤い髪的女である。

9 部屋

女の赤い舌になぶられ、光造の乳首勃起する。

女の手、光造の性器握り、

女 「これ、赤うなつても、かまんか」

光造 「(擦れ声) かまん」

女 「ちよつと、待つてな」

トイレから出てきた女、シュミーズ肩から外し、足元に落とすと、笑み浮かべて光造を見下ろす。

× × ×

女、光造の胸の汗の玉吸っている。

光造 「亭主でヤクザか」

女 「なんで？」

光造 「シャブ打つことあるんやろ」

女 「格好はヤクザやけど、うちが何遍、家をとび出しても、殺すどと言うだけで、殴れもせん男やけど……能なし亭主……ちよつと見せて」

光造 「なにをや」

女 「あれ」

小声で言うなり、蒲団跳ね除け、覗き込む。

女 「やつぱし、赤うなつとる」

女、くわえ、拭うように頭動かす。

光造 「まだ、固うならんやろ」

光造、女を自分の体の上に引き上げる。

光造 「何度もやって、痛うないんか」

女 「(唇の周りの唾液、舌出して舐め笑う)」

女、腰持ち上げ、体ねじり、光造の性器捕えようとする。

女 「折れて逃げてしまふ」

手を添えてみる。

光造 「いつも、こんなに何回も亭主とやつとるんかい？」

女 「うん(と鼻で返事)、あッ……」

一瞬目をつぶり、腰落すとほつとしたように目を開け、

女 「何回も何回も」

光造、唇ひきよせる。

唾液が糸を引く。

光造 「なんや、精液の味のような氣する」

女 「あんたもそんな味するよ」

女の腰、そろそろつとうねり始める。

× × ×

長く尾を引く叫び声。

光造、眼覚め、脇を見る。

蒲団を持ち上げると、女、光造の股間に顔埋めるようにして眠っている。

10 細い雨が降り続いている街、光造、ダンブを走らせている

11 建設会社・事務所・外

ブルトーザーやダンプカーが並んでいる脇にダンプ停めると、光造、小走りに事務所に駆け込む。

12 同・中

社長「大型けん引や大型特殊持つとるおまえらは、忍者部隊やで。己れの術を敵に教える忍者がどこにおるんじや。こんなお人好しのド阿呆ッ」

光造「わしが教えたれ言うたんじや。土方に運転教えちやいけんいう規則でもあるんか」

社長「光造、お前が土方よりましなモン食えとんのは何のお陰や。免許のせいやろ。免許持つとる奴、他におるんなら、お前でのうてもかまへんのや。それをわざわざ競走相手増やするような事しくさって、また、土方に戻りたいんか、え」

光造「土方が大型免許持つと忍者いうて、泡銭持つと社長いうんか」

社長「われ、わしの恩忘れたんか。誰のゼニで免許取ったんじや。なめた口きくとしばさあげるど」

光造「おう、やってみい。恩、恩いうて安い給料でこき使ひよってから」

「しっかりとしいや、あんたたち」

和子、立っている。
和子「土方あがりは、すぐ腕力やから、軽蔑するよ」

社長「われと関係あるか。黙つとれ。なんじや学校はどしたんじや」

和子「生理休暇や」

社長「わりや、へらへら笑いおつて、母親によう似くさつとる、どついたらるか」

和子「阿呆らし。ハツ当りやないか。うちもお母ちゃんみたいにカケオチしたるか、血やからな」

社長「けッ。淫乱め、物笑いの種じや。お前まで恥かかして。相手の男ぶち殺したる」

和子「ああ、恐ろし。ほんま、市議員かいな」

奥へ消える。

社長「おまえみたいなんにちよつかい出す男の阿呆ヅラ見てみたいわ」

光造と孝男、顔見合わせる。

光造「今日の配車、どないなつとるん？」

社長「お。まだ、決まらんのや。こないな雨やし、ちいと待機しとつてくれや」

孝男「コーヒーでも飲もか、おれ、おごろよつて」

出てゆく二人の背に、

社長「これから氣イつけよ。あかんもんはあかんぞッ」

13 喫茶店

光造「あの女、変つとるな。あん時も涙ひとつこぼさへんかったし、おまけに、わしん

時、腰動かしよつたで」

孝男、コーヒーを吹き、

孝男「そ、それ、ほんまか」

光造「(笑い)阿呆、そないな処女がおるか」

言いかけて、言葉吞む。

入ってくる和子、孝男を見下ろし、

和子「話があるのや」

孝男「(どぎまぎ)おれ? おれだけ?」

和子「夕方、舟着き場に来てほし」

和子、踵を返す。

顔、見合わせる孝男と光造。

と、

和子「配車ゼロやてッ」

二人振り向くが、和子、もう雨の中を走っている。

孝男「土方休みやつたら、おれらも休み、なにが大資本じや」

孝男、にやつく。

光造「気の早い奴じや」

孝男の股間脹らんでいる。

二人、笑う。

14 部屋

女、炬燵に頬すえついている。

入ってくる光造。

女「お帰り、早やかったんやねえ」

光造「土方休みやつたらわしらも休み」

開け放った窓の外、雨が白い。

光造「雨、入ってこんか?」

光造、ジャンパー脱ぎ、シャツ姿にな
る。

女 「夕方まで帰ってきてくれんのかなあ
と、ここでもんやり思ってたん」

光造、炬燵に足を突っ込み、煙草吸う。

女 「お腹、すかへん？」

光造「すいた」

女 「ぼんやり窓の外見て、あのデパートの
アドバルーンあがったあたりに、ラーメン
のおいしい店、あったと思ってたん」

光造「ラーメンやったらどこでもある」

女 「(笑い)それでさっき作って食べた」

光造、なんだとつられて笑い、

光造「寒い」

身震いして窓を開める。

その背中に、

女 「なあ、一緒に寝よ」

光造、肯き、ズボン脱ぐ。

女、光造に擦り寄り、光造の手を自分の
股間に導く。

女 「なあ、濡れてるやろ？」

光造の耳に息を吐きかける。

女 「起きたら、あんたおらんし……。うち、
辛抱できんと、自分でしたんよ。乳首がチ
クタク痛うなるし、あんたの靴下の臭いや
ら、下着の臭いやら、部屋中のあんたの臭
いがたまらんと、自分でしたんよ」

女、光造の体を上に乗せようとする。

女 「夜まで帰ってこないなら、こんなふう
にしてくれる人のところへ行ってしまうお
かしらんと思ってたんよ」

女、広げた足を立て、腰浮かす。

光造「そっから逃げてきたんやないのか」

光造、突き立てる。

女、思いつきり声をあげる。

光造、尻振り立て、腰強く打ちつける。

女、呻き、伸びあがり、身をくねらす。

光造「亭主はどないして、可愛いがったんじ
や。同じようにしたる、どないな格好や」

女、眼を開き、動きを止めた光造を見
る。

女 「……ええのん？」

女、のろのろと体起こすと、坐ったまま
光造の肩に両足を乗せる。

光造、刺す。

女 「こうや。……はよ、入れて」

女、交点見ながら声を立て、腰を左右に
揺らす。

震え始め、反り返り、果てる女。

光造「教わったんやな。何から何まで教わっ
たんやな」

痙攣の続いている女の腹見ながら果て
る。

濡れタオルで女の股間拭った光造、自分
のを拭おうとすると、

女 「いや」

光造の手を払い、光造の股間に仰向けに
潜る。

女、光造の足首持ち、犬のように舌這わ
せる。

光造、肘をついて、女の上に被さる。

目の前の女陰を見て微笑み、

光造「何人の男としたんじや」

女の揺れている赤い髪が止まる。

光造「いいんじや、いいんじや」

光造、タオルでそっと女陰をこすってみ
る。

スクリーのように絞られたタオル、吞
み込まれてゆく。

15 舟着き場

番屋の軒下に寄り掛っている孝男と和
子。

和子「……うち、責任取って欲しいんや」

孝男「責任……?!」

和子「そうや」

孝男「けど、責任いうたかて、……わしと光
やんにどないせい言うんや」

和子「二人も要らん」

孝男「けど、マワしたんは……」

和子「うち、処女やつたし、最初はあんた
や。そやから、あんたに責任取って欲しい
んや」

孝男「(ふてい、)どうすりやいいんじや」
和子「あれっすりなんて嫌なんや」

孝男「（呆然）……」

16 相合傘で歩いている光造と女

光造「痛いやろ」

女「ちよっとしみる」

とりすがるように光造の腕に腕を廻す。

繁華街。

女、立ち停ると、喫茶店指し、

女「ちよっとそこで待ってて。買物してくる。いつまでもはきもせんとはおれんし」

女、笑う。

光造「あるんか、金」

女「ちよっとだけやったら」

光造、ポケット探り、一万円差し出す。

女「すぐ戻ってくるから待ってて」

光造、喫茶店の軒下に駆け込み、女の後姿を見ている。

「ふられたんじやろ、兄貴」

酒臭い息を吐きかけ、アル中男、黄色い

歯見せて笑っている。

アル中男「一杯飲みたいね。兄やん、二百円

ないか」

光造、差し出された掌に二百円載せてやる。

「要らんことせんといてよ」

喫茶店から出てきた若い女、つかつかと寄ってくる、アル中男の手から硬貨取り上げ、光造に押し返す。

若い女「乞食みたいな真似しくさって。お父

ちゃんの恥はうちの恥や」

おどおどしているアル中男を引き立てるように連れてゆく。

17 喫茶店

両手いっぱいスーパリーの紙袋抱えた女、光造の席にくるなり、

「ほら」

と、紙袋突き出す。

女「レール買ってくるの忘れたとすぐそ

まで来て気づいたんやけど、かまわんわアと思うて。釘打って引っかけたらすぐでも使えるもん」

光造「カーテン買うたんか」

女「茶碗に箸に鍋も買うたんよ」

光造「パンティも買うたかい？」

助平ったらしく笑ってみせる。

女「見せたるか」

紙袋の奥、ごそごそひっかきまわす。

女「これがあんたの」

ひとつをテーブルに置き、もうひとつの紙包みのテープを丁寧に剝がす。

女「こんななんみたらクラクラするよ、ほら」

広げてみせる。

光造「小さいもんやなア、はみ出さへんか、毛」

女、一瞬考える目付きになるが、ハッとして店內見廻す。

こつちを見ているボーイ。

女、舌を出し、身をすくめ、

女「みんな男でいやらしいなあ」

パンティ紙に包み直し、

女「考えてる事というたら、あの事ばっかしやからな」

光造「なんじゃ、あの事て？」

女「知らん」

頭を振る女の顔、上気している。

光造「知らんのかやったら、わしが鼻の先にも擦りつけたるか」

女、うるんだ眼で光造を見返す。

18 傘の立った舟、小さく揺れ、川水が舟

りを叩く

裸の和子、起き上る。

和子「ちよっと向う向いてて、こつちみたらあかんよ」

和子、舟尾にしがむ。

和子「耳ふさいどって」

放尿、小さな弧を描く。

和子「ああ、せいせいしたわ」

転っていた手桶で川水汲み、股間を洗う。

孝男、舟を揺らす。

和子「あ、いや」

尻もちつく。

笑う孝男。

和子「うち、お腹おおいんよ。氣いつかな

んだ」

孝男、思わず半身起こし、和子を見る。

孝男「知らん。……誰の子や」

和子「あんたのや。最初があんたやから、あ

んなの子や。決つとる」

孝男「むちゃくちやや」

和子「うち、産むよ」

孝男「(絶句)……」

和子「この街、出えへん。どうせ、こんな街

におつてもろくなこといわれへんし……あ

んなかてしんどいやろ」

小魚がはねたのか、川面に白い飛沫。

19 お好み焼き屋

女、もそもそ口動かしながら、光造の注

ぐビール受ける。

光造「お姐さん、すまんけど、もう一本くれ

んか」

障子開き、内儀、顔のぞかす。

内儀「なんやろ」

女「おビール欲しの」

内儀「一本でっか？」

女、光造うかがう。

光造「二本じゃ」

女「始めて食べ物らしいもん、食べるわ」

うれしそうに笑う。

「お好み」、鉄板の上で音立てながら、

広がってゆく。

女「(声ひそめ)ねえ、またしたなつてき

た」

光造「よっしゃ。あとで時間かけてゆつくり

やつたるからな」

女「ほんまやね」

光造「ああ、おめこ、こわれても知らんど」

20 工事現場

陽を受けて、濡れた土、匂うように輝い

ている。

車座に坐りこみ、弁当つかっている人夫

たち。

ダンブのドア開け放った運転台でパンを

かじり、牛乳で流しこんでいる光造。

やつてくる孝男、弁当開ける。

光造「見せびらかしにきたんか、ほオ、可愛

らし弁当やな」

と、おかず摘み取り、

光造「うん、いけるで。見掛けによらんもん

やな。こら、ええ嫁さんになるで」

孝男、急に思いつめた顔。

孝男「……辞めよかしらん思とる」

光造「似合いうとこやけどな。あの親父さ

えおらんかったら、めでたしめでたしや」

孝男「大阪へでも行こか思とる。狭い町で土

方と一緒に働くことない思とる」

光造「大阪行て何すんじや」

孝男「修理工でもやるか思とる。……一緒に

行かんか」

光造「あんなとこ人間の生きていくとこと違

う。日も浴びんと、油まみれになつて。大

阪より鮪船のほうがええと違うか」

孝男「船はあかんのや。……女、乗られへ

ん」

光造「……本気で惚れたんか」

孝男を見る。

21 部屋

流しの横に洗った食器、布巾が被つてい

る。

鴨居に赤いエプロン、ブラウス掛つてい

る。

部屋の隅に幾つかの化粧品、並んでい

る。

女、庇に張ったビニール紐に、洗濯物を

干している。

女

「あ」

パンティ、落ちる。

いきなり、怒鳴り声。

恐る恐る覗くと瘦せぎすな女、パンティ

つまんで見上げている。

「殺したるか」

瘦せぎすな女、叫ぶなり、アパートの入

口に向つて、身を翻す。

女、慌ててドアのノブ押える。

シャブ中女、ドアを激しく叩く。

シャブ中女「出て来い、殺してやる」

女、ノブ握りしめ、身をすくめている。

シャブ中女「ここを開ける。殺してやるッ」
シャブ中女の亭主、走ってきてなだめる。

亭主「さ、帰ろう。も、どこにも行かないよ。ずっと一緒だよ、さ、解つただろ」

亭主、シャブ中女を抱くようにして去る。

女、ヘタリ込む。

22 薄暮

雨樋が微かな音を立て始める。

光造、ジャンパーを頭から被つたまま入ってくる。

蒲団の中からうかがう女の眼、怯える。

光造、電気のスイッチ引く。

女「なんや、あんたか。ジャンパーなんか被つとるから、びっくりした。うちを探しとる人かと思うた」

光造、突つ立ったまま、脱ぎ捨てられた女の服を見、女の裸の肩を見る。

光造「ここはわしの部屋じゃ。わしの他に誰が来た思たんじや。誰に来て欲し思たんじや。亭主か」

女「(肯く)……」

ひき裂かれたパンティ、投げつけ、光造「人が外で仕事しとるのに飯の用意もせんと、男、ひき入れてさかったんやろ。飯も作らん女に用ない。叩き出したるッ」

光造、蒲団引き剥がす。

光造「……?!」
女、裸に光造の汚れたブリーフをまといている。

光造、狼狽。

女、顔に手を当て、体震わせ泣き出す。

光造、困惑した態で、赤い髪撫ぜる。

女「……あんたがおらんかったから、恐おて……あんたにいて欲し思て、はいたんよ」

光造「こん変態が」

乱暴に抱きしめる。

雨音、激しくなる。

× × ×

女、身づくろいしながら、

女「その角、出たところのスーパーマーケットでラーメン安かったさかい、いっばい買うてきとるんよ。作って食べる?」

女、鍋に火を掛ける。

女「今度、給料入ったら、このガスコンロ、取り換えよ。うち、いつも火点けそこねるよ。昔からうっかり者やと言われたけど、こんな難儀するガスコンロで火傷したりすんの嫌やし。うちの事やから、火ついてなかつても忘れてしまうかも知れんし……」

光造「死んでもかまへんやないか。心中や」
女「阿呆らし」

ラーメンの袋取り出し、封を切る。

女「あのスーパー、安いなア」
沸騰する鍋にラーメン入れる。

女「卵なんかメチャクチャに安いし、あの棒のついたチョコレートなんか他より二、三円は安い」

光造「たった二、三円ぐらいか」

女「この辺りの人はそれを知らんと、安い買物しとるんよ。あのスーパーの卵特別安いのはどうしてなんやろ。養鶏場がそばにあるんかしらん」

ラーメン沸きこぼれそうになり、慌てて火を止める。

女「できた、できた」

ドンブリ両手で捧げ持ち、光造の前に置く。

女、自分のドンブリ持つて坐ると、

女「どうせな、今日はスーパーへ行つて卵、買おうかどうか迷つて買わなんだ時からついてなかつたんよ」

いやな思いをふつきるようにズルズルツと汁する。

女「卵でもひとつあったらインスタントつて感じにならんねえ」

光造「この部屋入ったら、女の匂いムツとした」

女「……どんな匂い」

光造「どんないうても、とにかく女の匂いじや。……クラッカーみたいな匂いいうん

か」

女 「それやったら、あなたの匂いや」

光造 「前はそんな匂いじゃなかったで、この部屋」

女 「独り者の男には独得な匂いがついているよ。あなたは最近になってだんだん取れてきたけど、なんや知らんムツとしたもんがこびりついている」

光造 「よう知つとるな」

女 「うちかてこんなんやけど、鈍いことないもん。ここに来た時からずつとその匂いがあなたの体からしとつたんやから。なんやろと思た。ずうつと思つてた」

光造 「分らんかったなア」

女 「自分では分らんと思う。あなたを抱いた人やつたら分るかもしれへんけど」

光造、きれいに汁まで飲み干す。

女 「蜜柑あるよ。あそこ」

ラーメン頬ばつたまま、箸で指す。

光造 「雨、やんでもうたで」

すっかり濡れた洗濯物の間に月。

23 小舟の中

孝男、和子をまさぐりながら、
孝男 「ちよつとの辛抱できんかい？ まとま

つた金、稼いだら戻つてきて、社長に話通して世帯持つから。な、待つておれよ」

和子 「嫌や。一緒に行く」

和子、乳房を手ですくいあげ、

和子 「ほら、乳房がちくちくかゆい」

和子、両手で乳房をしぼるようにする。

和子 「もう、出るんよ」

懸命にしぼる。

孝男、眼をそむける。

和子 「見てて、出るんやから」

和子の乳房、月の光に濡れて光る。

24 部屋

女、光造を揺り起している。

女 「ほら、ほらつたら」

光造、眼開ける。

長く尾を引く叫び声、響く。

女 「あの女が気持よがつて、豚のように声上げとるんじやよ」

光造 「おまえの声も、下じゃあんな風に聞こえとるんやろ」

女 「うち、あんな声出すんか……いやらしな」

光造 「なんでや、生きとる証拠の声じや」

女、光造の腰に足をしかけ、

女 「なあ、豚の声、出させて欲し」

光造にまたがつてゆく。

女 「行きたいよ」

光造 「かまんよ。大分姉ちゃんにも会うてないし、ちよつと寄つてみるだけじや」

女 「うち、知らん人、苦手なんよ」

光造 「わしかて知らん人やつたらが」

女 「……」

26 家

女、光造の後に坐っている。

姉 「そうかい、一緒におるんかい」

やせた男、首かしげ、

男 「どこぞで見たような気がするな」

姉 「そういうたらさつきから私もそう思ってた。あなた、この前まで××の奥の方に

住んでなかった？」

女、光造の背に隠れるようにし、

女 「（小声で）そっちの方は知らん」

姉 「確か××という土地からまだ奥に入つたところやけど、車で呉服の生地いっぱい

み込んで行つた時に、集会場みたいなのと

へ呉服見に来てくれた気がするよ」

女、知らんと首振り、光造の耳に口寄せ、

女 「おしっこ、したなつた」

光造 「あそこや」

便所の戸が閉まるのを待つてたかのよう

に、

姉 「これ？」

左巻きの合図、作つてみせる。

光造、苦笑するが肯く。

姉、光造の太腿叩き、

「羞かしよ」

口を手で隠し、声殺して笑う。

女、光造の背中真後ろに坐り込む。

姉 「そうかん、人違いやの」

自ら肯き、

姉 「呉服を車につんで走り廻つてたら、いろんな事に出会うよ、なあ、お父ちゃん」
男、笑い浮かべ、

男 「光造らもそんなんやろか、おれらもやつぱりお母ちゃんの言う通りやね。俺、車を運転ようせんさか、お母ちゃんのすぐ横におつて、ちよつとお母ちゃん、ゆられてムズムズして来たわ、というても、何を、この不精者は、と言われるが、自分がそうなってきたらこつちの都合などはおかまひなしや。モーターのすぐ前まで来て、お父ちゃん、このままモーターに入るよ、ええなあ、と返事も訊かんと入口を突つこんどる」

身振り混じえる男、小指のない手がしきりに動く。

27 モーター・風呂場

男の声「わし、前の日にちよつと遊んどつて、キスマークつけられたと思つたさか先に入つて調べてみたんや」

男、鏡に向つて、ためつすがめつしているが、姉の気配に慌てて、湯槽に飛び込む。

姉 「わア、大きい風呂場やねえ。こんマツ

トやね、説明書きにあつたんは」

男 「何の説明や」

姉 「泡踊りや」

男。こそこそ出ようとする。

姉 「なに慌てとるんや。われ、きのう、遊んできくさつて、今日は締めあげたるさか、覚悟し」

28 家

男 「キスマークなかつたんやけど、覚悟していまかいまかと待つとつたら、出て来えへん。覗いてみたら、もう、阿呆らしいやら、情ないやら」

29 モーター・風呂場

姉、体中に泡立て、マット相手に泡踊り。

姉 「何、ボケツと見てんのや、はよ、うちに泡踊りせんかい。誰のゼニでトルコ通つてたんや」

男 「されるんは馴れとるけど、せえいわれてもなア」

ぶつくさ言いながらも、懸命にサービス。

30 家

女、笑いもしない。

姉 「その寄り道のせいで展示即売会、明る日になつてもうてな。見に来てくれんかった呉服？ あんたによう似てたけどな」

光造「髪、赤かつたか？」

姉 「それがあやふやな記憶しかないんよ」
女、うつむいている。

姉 「（急になだめ顔）なあ、心配せんかて、身許調査なんてせえへんから。光造かて、ロクな事はしとらんやし」

女、指で光造の尻、こすっている。

31 泣きながら歩いている女に傘差し掛けている光造

光造「氣にするなて。おまえがどこで何してようとわし、かまんのやから」
女「教えたるよ、何でも。……ヤキモチやかしたるよ」

光造「うつとしいて。ただでさえ雨降つて息つまつとんのに。女はアレがよければええんじや」

女「うちのアレがそんなにええんか」

光造「ええよ」

女「仕込まれたんよ。みんな教わつたんよ」

更に泣きじゃくる。

光造「……（ちりちりと昂ぶってくる）」
32 部屋

光造、女を押え込み、指で女陰開き、息吹き込みながら、舌動かす。

女「いや」

吐息と共に女の太腿、弛緩する。

女「汗かいたるやろ」

女、光造の尻鷲掴みにし、爪立てる。

女「も、入れて欲し……足かついで入れて欲し……」